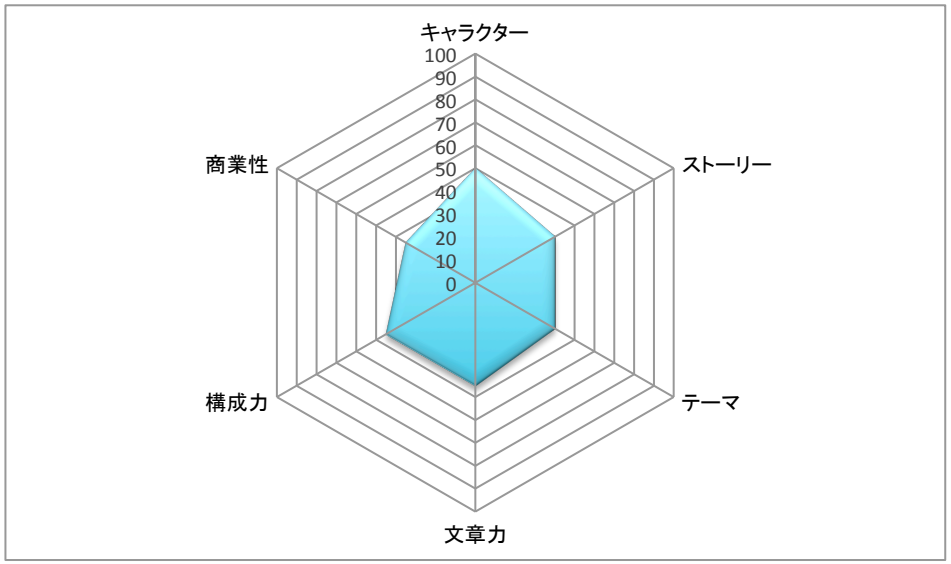
第1回　ライトノベル作法研究所主催　大夏祭り大会　選評評価シート

作品名：「こいぶみ」　　テーマ：「誰よりも美しいのに、その顔をけして人に見せられない美少女」

キャラクター	ストーリー	テーマ(設定)
50	40	40

文章力	構成力	商業性
45	45	35



・見受けられる基礎的な問題点

	・キャラクターに個性がない(もしくはその個性を生かしきれていない)
	・キャラクターの設定にオリジナリティがなく、読んでいて新鮮さに欠ける
	・キャラクターの行動に動機がなく、物語がご都合展開になってしまっている
	・物語の方向性が定まっておらず、読む側にだるさを感じさせてしまっている
	・物語に登場人物達にとっての障害が登場せず、盛り上がりに欠ける
	・テーマ(世界観)が既存の作品の焼き回しで差別化されていない
	・物語上必要のない設定を多く登場させ過ぎている
	・意味の無い暗いテーマ(人の死、暴力等)が扱われており、後味が悪い
	・プロットの練り方が甘い(基本的な起承転結が意識されていない)
	・時系列の流れが不自然、もしくは視点移動が多過ぎて構成が理解しにくい
	・物語の情景描写が足りず、読んでいて状況を想像できない
●	・文章が難解かもしくは文法的に問題があり、よく読まないと内容が理解できない
	・伏線的な要素がなさすぎて驚きに欠ける
	・笑いをとれる下ネタが少なく、読んでいて冷める下ネタが多い
	・「この作品の最大の魅力はこれ！」というものがない

・総評（もしくは、今後これをやったら更に面白い作品を書けるようになるかもという話）

・「こいぶみ」のダブルミーニングが巧い。
・当作品の最も特徴的な点は、作中作の叙述トリックでしたという点であるが、恐らく読み手からは「そういうことか！」という驚きよりも「夢オチかよ！」に似た反感を買う可能性が高い。(極端に例えるなら、『好きです付き合ってください』と告白されてokしたあとに『嘘でしたー！残念！』と言われるようながっかり感か)。その理由として、叙述トリックを「とりあえず色々散らかった時にそれらを一掃できる便利な道具」として使ったからということが考えられる。なのでこれの解決策としては、ラストが包丁をのどもとに突き立てる→これが小説そのものでした、とするのではなく、例えば「ラストが『私小説を書いてみたいな』というセリフで終わる→実はこれがその小説そのものでした」といったような、叙述トリックを使うことに作品的な意味があったように演出するしかない。
・文章が長い箇所が多々見受けられた。「ずっと後悔してた。～こんなんだから」までは、長過ぎて結局何が言いたいのか分からない。本当に読み手に感じて欲しいことをまとめたうえで、短く簡潔にまとめた方がむしろ伝わるものは多いと思われる。

合計加点ポイント 0

総得点：　255 / 600

B方式総合得点：　10838 点